礼拝説教（2024 年 12 月 1 日）

説教者：中村信哉

聖なる、祝福の日

出エジプト記 20 章 8-11 節

はじめに

私たちの教会では、第二週と第四週の礼拝において、「十戒」を朗読しています。「十戒」の前半部分である第一戒から第四戒までは、神様に対する「礼拝」について教えています。

第一戒の**「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」**は、私たちが誰を礼拝すべきかを教えています。つまり「礼拝の対象」について教えています。第二戒と第三戒の**「あなたは、偶像を造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない」「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない」**は、私たちがどのように礼拝してはならないかを教えています。つまり「礼拝の方法」について教えています。そして第四戒の**「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」**は、私たちがいつ礼拝すべきかを教えています。つまり「礼拝の時」について教えています。

「十戒」の第一戒から第四戒は、イエス様によれば、次の御言葉に要約できます。**「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」（マタイ 22:37）**。つまり「神様を愛すること」です。神様は私たちに、御自身を愛することを求めておられるのです。では、目に見えない神様を、私たちはどうやって愛すればよいのでしょうか。先ほど、第一戒から第四戒は、神様に対する「礼拝」について教えられていると言いました。私たちは、「礼拝」を通して、「神様への愛」を表現するのです。神様は私たちに、礼拝することを求めておられます。「礼拝」を通して、「神様への愛」を表現することを、私たちに求めておられるのです。

今日は特に、第四戒の「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」という戒めを通して、私たちは神様をいつ礼拝すべきか、私たちの「礼拝の時」について学びたいと思います。

私たちはなぜ毎週日曜日に神様を礼拝するのでしょうか？なぜ一週間に一回なのでしょうか？なぜ十日に一回、月に一回、また一年に一回ではいけないのでしょうか？現代社会は忙しいです。ある人にとっては、月に一回ぐらいのほうが楽なのかもしれません。またある人は、「クリスマスぐらいは礼拝に行かなきゃ」と言って、年に一回クリスマスの時だけ礼拝に来るという人もいるかもしれません。しかし私たちは、毎週日曜日に集まって神様を礼拝します。それはなぜなのでしょうか？

1. 第四戒が求めていること

まず神様は、第四戒で私たちに何を求めているかということを確認したいと思います。第四戒で神様が求めている中心的な内容は、「安息日を覚えて、聖なる日とする」ということ

です。旧約時代の安息日は、七日目の土曜日です。旧約時代は、一週間のうち七日目の土曜日を「聖なる日」とすることが求められたのです。

では、「聖なる日とする」とは、どういうことでしょうか。聖書の中で、「聖とする」ということは、「聖別する」「区別する」という意味があります。安息日を「聖なる日とする」ということは、その日を「特別な日とする」「他の日と区別する」ということです。では、私たちは、具体的にどのように安息日を「特別な日」とし、「他の日と区別」したらよいのでしょうか。それは、**「六日間働いて、すべての仕事をする」**ということです。一週間のうち六日間は、神様は私たちに仕事をする日として与えてくださっています。しかし神様は、一週間のうち一日だけは、**「いかなる仕事もしてはならない」**と言われるのです。私たちはどのように安息日を「聖なる日」「特別な日」とし、「他の日と区別」するのでしょうか。その一つは、「仕事をしない」ということです。神様は私たちに、一週間のうち六日間を、「私たちの仕事」のために与えてくださっています。しかし神様は、一週間のうち一日だけは、「特別な日」として御自身が所有権を主張されるのです。「この日だけはわたしのものだ」「この日だけはわたしのために献げよ」と言われるのです。神様は、時間をも創造された方です。そして私たちに、時間を与えてくださっています。私たちは基本的に、時間を自由に使うことが許されています。一週間のうち六日間は、私たちは自由に時間を使うことが許されています。しかし、一週間のうち一日だけは、神様のために使うことが求められているのです。与えられた時間の７分の６は、私たちは自由に使うことができるのです。しかし７分の１は、神様に献げることが求められているのです。

では、なぜ私たち人間は、安息日を守り、「聖なる日」としなければならないのでしょうか。それは、第一に、神様が六日間ですべての創造の業を終えられ、七日目に創造の業を休まれたからです。私たちは、神様の模範に倣って、六日間ですべての仕事を終え、七日目は仕事を休まなければならないのです。私たち人間は、神様のかたちに造られました。神様のかたちに造られた私たち人間は、神様と同じように、六日間で自分のすべての仕事を終え、七日目には休まなければならないのです。

私たち人間が安息日を守り、「聖なる日」としなければならない第二の理由は、神様が安息日を祝福し、「聖なるもの」と宣言されたからです。安息日は「祝福の日」です。神様が私たちを祝福してくださる日こそ、安息日なのです。神様は、一週間ごとに「祝福の日」を設けて、私たちを祝福してくださるのです。

宗教改革者のカルヴァンが作成した『ジュネーブ教会信仰問答』には、**「われわれのうちに主がみ業を行なわれるために、われわれ自身のもろもろの業をやめる」（ジュネーブ教会信仰問答172）**とあります。私たちは、私たちのうちに神様の御業が行われるために、つまり私たちが神様の祝福に与るために、「安息日」に仕事を休むのです。私たちが仕事をし続けていたら、神様が私たちのうちに御業を行なう隙、祝福を与える隙がありません。私たちが仕事を休まなければ、神様は私たちのうちに御業を行なえません。私たちを祝福できません。私たちは、神様の祝福に与るためにこそ、仕事を休むのです。

2. 第四戒は今もなお従うべきものか？

ある人は言うかもしれません。「十戒は旧約時代の律法だからもう守らなくていいんじゃないか？」「現に私たちは土曜日の安息日をもはや守っていないじゃないか？」。確かに私たちは今、土曜日の安息日を守っていません。私たちは毎週日曜日に集まって礼拝をしています。では私たちは、もはや安息日を守らなくてよいのでしょうか？安息日を守らなくても罪ではないのでしょうか？そうであるならば、私たちは毎週行っている礼拝に、行ける時だけ行けばいい、行きたい時だけ行けばいい、説教を聞きたい時だけ行けばいい、クリスチャンの兄弟姉妹に会いたい時だけ行けばいい、ということになってしまいます。

「十戒」は、今もなお私たちが守るべき神様の戒めです。これを破れば罪を犯すことになります。私たちは確かに、救われるために「十戒」を守るわけではありません。「十戒」を守ることは、救われるための条件ではありません。「十戒」は、救われた私たちがどう歩めばよいのかを教える神様の戒めです。「十戒」は、私たちに罪とは何かを教え、神様が私たちに何を求めているのかを教えているのです。

確かに、旧約時代の律法の中で、動物のいけにえ等に関する戒めがありました。それらは、イエス様が十字架に架かられたことによって廃止されました。イエス様が十字架で、御自身をいけにえとして献げてくださったからです。イエス様がただ一度、御自身をいけにえとして命を献げてくださったことにより、私たちはもはや動物のいけにえを献げる必要はなくなりました。しかし「十戒」などの「道徳に関する律法」は、今もなお私たちが守らなければならない律法です。イエス様が十字架に架かってくださったから、神様以外を礼拝してよくなったとか、偶像を拝んでよくなったとか、人を殺してもよくなったとか、盗んでもよくなったとか、姦淫してもよくなったということにはならないからです。私たちは、今もなお人を殺してはならないように、今もなお「安息日」を守らなければならないのです。今もなお神様だけを礼拝し、偶像を拝んではならないように、今もなお「安息日」を守らなければならないのです。今もなお人を殺したり、人の物を盗んだり、姦淫してはならないように、今もなお「安息日」を守らなければならないのです。旧約時代、「安息日」を破った者は、死刑にされたほどです（出エジプト記 31：14-15）。それほど、「安息日」の戒めは重要なものなのです。

3. 今の安息日はいつか？

では、なぜ私たちは土曜日の安息日を守っていないのでしょうか？私たちの教会の信仰規準である『ウェストミンスター小教理問答』には、このように書いてあります。**「神は、世の初めからキリストの復活までは、週の第七日を週ごとの安息日と指定されました。そしてそれ以降は、世の終わりまで継続して、週の第一日を安息日に指定されました。これがキリスト教安息日です」（問 59）**。確かに旧約時代の安息日は、七日目の土曜日でした。しかし、イエス様が復活されてからは、週の初めの日の日曜日に変更されたと言うのです。

なぜ安息日は、七日目の土曜日から週の初めの日の日曜日に変更されたのでしょうか？それは、第一に、イエス様が復活されたのが日曜日であったからです。第二に、イエス様は復活後、何度か弟子たちの前に現れましたが、それが日曜日だったからです。聖霊が降ったペンテコステの日も日曜日でした。確かに聖書に、安息日が土曜日から日曜日に変更されたと明確に書かれていません。しかしイエス様の弟子たちは、イエス様が復活された日曜日こそ、イエス様に会える「特別な日」として集まり始めたのです。そして日曜日に集まって聖餐式を行ない（使徒 20：7)、献金を集め始めたのです（Ⅰコリント 16：2)。つまり礼拝を始めたのです。

4. 主日は何をするべきか？

イエス様を信じる私たちにとっての安息日は、週の初めの日の日曜日です。私たちはこの日を安息日として覚え、「聖なる日」「特別な日」として、「他の日と区別」しなければなりません。神様は私たちに、月曜日から土曜日の六日間を、仕事をする日として与えてくださっています。しかし、週の初めの日の日曜日だけは、「聖なる日」「特別な日」として、「わたしのために献げよ」「この日はわたしのものだ」と主張されるのです。それは、私たちが神様の祝福に与るためです。私たちはそのために、この日を「聖別する」のです。

私たちは、安息日である日曜日に仕事をしなければそれでよいのではありません。神様の祝福に与るために、私たちは礼拝をしなければなりません。週の初めの日である日曜日は、イエス様に出会える日です。イエス様は言われました。**「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」(マタイ 18:20)**。イエス様は、安息日である日曜日に集まる私たちの礼拝に臨在されます。そして、イエス様が聖霊と御言葉を通して、私たち一人ひとりに語りかけ、私たちを祝福してくださるのです。ある人は、礼拝は説教を聞きに行く所だと考えています。しかし、礼拝は聖書の学び会ではありません。礼拝は、イエス様との交わりの時です。礼拝に臨在されるイエス様との交わりの時です。今も確かに生きておられる神様との交わりの時です。私たちは礼拝で、昔話を聞きに来ているわけではありません。今もなお生きていて、私たち一人ひとりに語りかける「神の言葉」を聞きに来ているのです。私たちは美しいメロディの讃美歌をただ歌いに来ているわけではありません。私たちの讃美を喜び、私たちの讃美を住まいとされる神様に向かって賛美を献げているのです。また私たちは、自分たちの気休めのため、ご利益のために祈っているわけではありません。私たちの祈りを確かに聞き、今も生きていて、私たちのために御手を動かしてくださる神様に祈りを献げているのです。私たちは過去の神様、死んだ神様に礼拝しているのではなく、今も生きていて、礼拝に臨在される神様に礼拝をしているのです。

また安息日の礼拝は、霊的な安息に与る時です。私たちが究極の安息を得る時は、イエス様が再び来られる世の終わりの時、神の国の完成の時です。また私たちが死を迎えて天国に召される時です。安息日の礼拝は、イエス様が再び来られる神の国の完成の時、また天国に召される時のような霊的な安息を映し出すようなものです。毎週の安息日での礼拝でこそ、

私たちはその前味を味わうのです。私たちがやがて経験する天国での安息、神の国の完成の時の安息は、私たちの礼拝の何倍も素晴らしいもの、比べものにならないほど祝福に満ちたものです。私たちは、毎週の安息日での礼拝で、究極の安息を待ち望むのです。

5. 安息日の例外規定

では私たちは、たとえどんな事情があっても、安息日には仕事を休まなければならないのでしょうか。『ウェストミンスター小教理問答』には、次のように書かれています。**「安息日は、他の日には合法的であるこの世の業務や娯楽からも離れて、その日まる一日を聖く休むことにより、また、やむを得ない働きと慈善の働きに用いられる時間を除き、すべての時間を公的私的に神を礼拝する営みに費やすことによって、聖別されなければなりません」**。安息日は、基本的に仕事を休むことが求められています。しかし例外があるのです。「やむを得ない働きと慈善の働きに用いられる時間」は認められているのです。その根拠となるのは、マタイ 12 章で、イエス様が安息日に片手の萎えた人を癒して、こう言われたことです。**「安息日に良いことをするのは律法にかなっています」（マタイ 12:13）**。「やむを得ない働き」とは何かを判断することは難しいことですが、確かに現代社会においては、「やむを得ない働き」はあるでしょう。病院や福祉施設など、人の命や生活を支える仕事もその一つでしょう。また人々の生活を支える上で、どうしても必要な仕事が他にもあるでしょう。それらは例外として認められるのです。しかしやはり一人ひとりが、その都度「やむを得ない働き」かどうかをよく祈り見極めていくことは必要でしょう。

また安息日は、イエス様が癒しをなされたように、「慈善の働き」に用いられる日でもあります。ですから私たちの教会では、安息日の日曜日に子ども食堂やオレンジカフェを行うのです。安息日に、貧困や孤独、様々な困り事を抱える家庭や高齢者たちに仕えることを通して、安息日を「聖なる日」として聖別したいと思っているのです。

おわりに

最後に、寿夫牧師のことを少し話したいと思いますが、寿夫牧師の最終学歴は、慶応義塾大学「中退」となっています。寿夫牧師は、高校を卒業してすぐに宣教師のもとで伝道の道に進みました。そのため大学には進学しませんでした。しかし、牧師になってから通信教育で慶應義塾大学に通い始めました。牧師をしながら大学の学びを続け、ついに卒業試験を残すのみとなりました。ところが、その大学の卒業試験が「日曜日」であったのです。寿夫牧師は、すでに牧師であったこともあって、「日曜日」に礼拝を休むわけにはいかないと思って、その卒業試験を受けずに、大学を中退することにしたのです。卒業試験を受ければ、「慶應義塾大学卒」という誇り高き学歴が残ったのです。しかし寿夫牧師は、高学歴を残すことよりも、「たった一回の日曜日」である「安息日」を守ることを重んじたのです。そして、高学歴を残すことよりも、神様の祝福に与ることを求めたのです。安息日は、神様の祝福に与る日です。毎週、神様の祝福に与ることが、私たちの人生の祝福となるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、一週間の七日のうち、一日を「特別な日」「聖なる日」とされました。私たちにとってそれは、イエス様が復活された日曜日、「主の日」です。あなたは、一週間ごとに私たちに休みを与えてくださいます。また一週間ごとに、神の国の祝福を礼拝において現わしてくださいます。安息日の礼拝は、私たちにとって、身体的にも、霊的にも必要なものです。またあなたが命じられたものです。どうか私たちが、あなたへの愛を込めて、安息日の礼拝を聖く守っていくことができますように。またあなたの祝福を求めて安息日を聖別していくことができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。